

プライマリ・ケアにおける 患者安全・質改善の 地平線

プライマリ・ケアにおける安全と質を再構築する

長らく「患者安全」や「医療安全」という言葉は、高度に管理・統制が可能な急性期病院において、いかにして医療事故を防ぐかという文脈とほぼ同義で語られてきました。しかし、地域包括ケアシステムが社会の隅々まで浸透し、未曾有の超高齢社会を迎えた日本において、医療の最前線は病院で完結することではなく、地域全体、そして患者さんの「生活の場」へと着実に広がってきています。

病院での急性期医療と、診療所での訪問診療・地域医療の双方に関わってきた一人の医師として日々痛感しているのは、プライマリ・ケアの現場が直面している「安全」のあり方が、病院のそれとは根本的に異なる難しさをもっているという事実です。

限られた時間と情報のなかで迫られる外来での診断推論の不確実性、高齢者の生活を脅かしかねない多剤併用（ポリファーマシー）と処方カスケードの弊害、さらには、徹底した管理が不可能な「在宅」という空間において、「転倒などのリスク回避」と「自分らしく生きる尊厳」をどう天秤にかけるか。これらは日常の診療風景のなかに紛れ込んでいますが、きわめて複雑な課題と言えます。

本特集『プライマリ・ケアにおける患者安全・質改善の地平線』は、こうしたプライマリ・ケア特有の課題を、医療者個人の努力不足や注意義務違反といった自己責任論に矮小化せず、システム構築と多職種チームの協働によって取り組むべき「質の改善」という前向きなテーマとして再定義することを最大のねらいとしています。

本編への導入となる第0章では、「なぜ今、プライマリ・ケアにおける患者安全・質改善が重要なのか」という根源的な問いに向き合います。病院完結型ではない、地域全体で患者を支える新たな安全管理の概念を提示するとともに、超高齢社会におい

て日本の医療システム全体の持続可能性を握るプライマリ・ケアの未来像を、患者経験価値(PX)を含む質評価の視点から紐解きます。

第1章『診断エクセレンス―「誤診」のスティグマを超えて』では、診断の安全性の話題を中心に扱いました。認知バイアスへの対策や不確実性に関するコミュニケーションの技術、そして患者自身をパートナーとして巻き込むことなどを含めて、「診断エクセレンス」の追求について論じます。第2章『在宅医療という「非管理空間」のリスク管理』および第3章『処方カスケードを断ち切る―ポリファーマシー対策』では、在宅医療という非管理空間での多職種連携を通じたリスクマネジメントのあり方や、薬局・薬剤師との協働によるポリファーマシーへの実践的な対応を取り上げています。

さらに第4章『デジタルヘルスとハイブリッド診療の安全規範』では、急速に進化するデジタルヘルスとハイブリッド診療における安全の話題を取り上げます。AIの自動化バイアスをいかに回避するか、オンライン診療の限界をどう補うか、そして分散する診療情報を個人健康記録(PHR)でどのように統合するか。テクノロジーでプライマリ・ケア医の機能を強化しつつ、情報セキュリティを守り抜くための実践的な視点も提示します。最後の第5章『組織文化・教育・制度設計』では、小規模診療所における「責めない」安全文化の醸成や、ケアの断絶を防ぐためのケア移行(care transition)の仕組みの重要性など、組織づくり・教育・制度設計の根幹を紐解きます。

質の改善と安全に取り組むにあたっては、医療職の頭の中、また診察室や医療機関の中だけではなく、患者さんを取り巻く環境に広く思いを馳せる必要があります。今回の特集は非常に意欲的な内容に仕上がったと感じています。このような多角的な視点をもつ本特集が、世界の潮流である患者安全・質改善の概念を日本の診療現場へと落とし込み、明日からの地域医療を支える実践的な「安全と質の羅針盤」となることを確信しています。最後になりますが、ご多忙のなか、本企画の趣旨にご賛同いただき、珠玉の実践知をお寄せいただいた執筆者の皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。



綿貫 聡

医療法人社団おうちの診療所